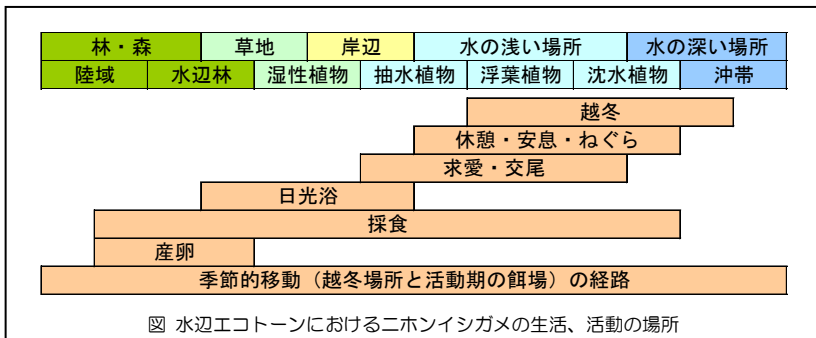


③ 池や水路のカメ

愛知県には、日本列島のカメ基本 4 種であるニホンイシガメ（以下イシ）、クサガメ（以下クサ）、ニホンスッポン（以下スッポン）、ミシシippアカミガメ（以下アカ）が全て棲息しています。基本 4 種は全て半水棲で、池や水路の水辺エコトーンを生活の場としています（下図）。したがって水辺エコトーンが悪化するとカメは減少してしまいます。逆にカメたちが健全に生活している状況が確認できれば、その場所の水辺エコトーンが自然環境は良好であると見なせます。



イシは世界で本州、四国、九州にしか自然分布していない日本列島の固有種です。クサがかなり多い西日本とは対照的に、東海地方では丘陵地や山地を中心にイシがたくさん棲息していました。しかし現在では愛知から急速に姿を消しており、国および愛知県の両方のレッドリストでは「準絶滅危惧（NT）」に位置付けられていますし、市でレッドリストを作成している名古屋市でも岡崎市でも「絶滅危惧Ⅱ類（VU）」に指定されています。

激減の原因の第 1 は人間の環境改変による生息場所の減少です。数十年前の高度経済成長期以来、川やため池が護岸工事をされたり埋め立てられたりして生息地が奪われてきました。そして近年では、里山、里地のため池や水路が適切な手入れをされなくなったために植物が繁茂し過ぎ、カメが生活できなくなった場所が増えつつあります。

原因の第 2 は、最近増えているアライグマやウシガエル、ブラックバス、コイ、カムルチーなどの捕食性外来種によるイシの捕食や傷害です。また第 3 の原因として、この 10 年ほどで高まったイシのペット需要により、愛知県では全国で最も野生個体が乱獲されるようになったことです。

野外での観察、調査の時にはカメの種類や個体数に加えて、植生や自然環境の変化、外来種の棲息状況などを調べる必要もあります。

クサは本州、四国、九州の他朝鮮半島、中国東部、台湾に広く分布する種

で、東海地方では濃尾平野の低地に棲息していました。国や県のレッドリストには挙げられていませんが、名古屋市版では「情報不足」とされています。

2010年頃からクサについては、DNAを用いた系統分類学的、生物地理学的研究、遺跡からのカメの出土状況、および古い文献や絵画の情報により、日本列島の在来種ではなく、江戸時代に中国や朝鮮半島から移入された外来種であるという説が出されました。しかし生物学的研究についてはサンプル数が少ないなどまだ不十分ですし、最近では中世や弥生時代の遺跡からもクサが出土しています。日本列島にとってクサが外来種であるという可能性は棄却し切れませんが、科学的な結論が出ているわけではありません。

ところでクサには別の面の外来種問題があります。数10年前から西日本や中国で養殖された子ガメがペットとして大量に流通していて、一部が野外に放逐され、定着しているのです。イシしか棲息していない池や川にクサが放逐されると、イシと異種間交雑して、繁殖能力のある雑種個体を生み出してしまい、在来のイシに遺伝子汚染をもたらします。したがってイシとクサの両種が生息している場所では、観察したり採集したりした個体が交雑か否かも確認する必要があります。アカはこの数10年、県内で分布を拡げ、急増しています。このカメは日本を含めて世界中で増加しており、世界の侵略外来種ワースト100にも入っていますし、日本では生態系被害防止外来種の緊急対策外来種に指定されています（令和5年6月から条件付特定外来生物に指定）。雑食性ですが、成体では草食性が強くなります。オニバスなどの希少な水生植物、あるいはハス（れんこん）やイネなどの農作物が食害されている地域も、県内を含めて知られてきています。カメの口はくちばしなので、ハスなどの浮葉植物の葉には、周囲を咬めばV字型の切れ込みが入り、葉を折りたたむように咬めば菱形の穴が開きます。イネのような抽水植物は根の近くが咬み切られ、上部の葉が水面に散乱します。

スッポンは県内では現在分布域を拡げており、個体数も増えているようです。スッポンは日本では縄文時代から食用にされてきたことが知られており、食用、あるいは養殖のために生体が頻繁に移動させられてきたようです。そのため現在生息している個体が在来なのか、それとも外来個体が由来なのかまったく分からないカメです。環境省版、愛知県版、名古屋市版のいずれのレッドリストでも「情報不足」種とされています。

近年県内では基本4種の他にも、カミツキガメやワニガメ、ミシシッピニオイガメやリバークーターなど、ペットに由来すると考えられる変わったカメが野外で見つかっており、野外調査での種の同定には慎重を期さなければなりません。新たな外来ガメ問題の発生も心配です。今後野外での観察や調査をより進めていき、県内のカメの生息状況を十分に把握していかなければなりません。そして絶滅や激減が危惧されるカメの種や個体群は保全し、外来のカメは防除する必要があります。

背甲後部は
鋸歯状



孵化直後のニホンイシガメ



孵化直後のカミツキガメ



(上: 渥美半島, 2008-9-19, 矢部 隆)
(下左: 房総半島, 2015-9-30, 田村ユカ)
(下右: 愛知県, 2017-8-9, 矢部 隆)

ニホンイシガメ カメ目 イシガメ科

Mauremys japonica (Temminck et Schlegel)

にほんれっとう こゆうしゅ
日本列島の固有種

【形態】

メスの背甲長は 20cm、オス 12cm。背甲は黄土色で甲板ごとに黒い斑紋がある。背甲後部は鋸歯状だが、老齢個体では摩耗する。腹甲は黒く後端が橙色のことがある。

【分布と生態】

日本の本州、四国、九州にのみ分布する。産卵期は 6~7 月が中心。秋と春に水の浅いところで求愛交尾する。

【さがすポイント】

池や川の岸では日光浴をしているカメを観察できる。川や池の土手や橋の上からは、水底や水面にいるカメを観察できる。双眼鏡を使うとよい。

【よく似た種】

クサガメ、ミシシippアカミミガメ、ニホンズッポン、その他の野外放逐された淡水棲カメ。甲の縁のギザギザが目立つ幼体は、カミツキガメの幼体と間違われることがある。

【参考資料】 県 RDB 動 p.190

クサガメやミシシippアカミミガメが低地の開けた止水の池や川を好んで棲むのに対し、ニホンイシガメは山麓部のため池や流れのある谷川に棲むのがふつうです。

雑食性で、おもに水中で生きた小動物や魚などの死体、水生植物を食べますが、陸上で落果、鳥獣の死体、土壤動物を食べることもあります。

産卵期の明け方には、地面に穴を掘って、長さ 4cm 弱、幅 2cm 弱の楕円体の卵を 6~7 個産みます。

秋と春には水の浅い所で、オスがメスに対面して、掌を外に向けた前肢を交互に揺らして求愛します。

3本の
隆起した畝

黒縁の黄色い模様

眼も真っ黒になる

黒化したオスの頭部

(豊田市, 2007-7-2, 矢部 隆)
(右下: 豊田市, 2013-4-6, 矢部 隆)

クサガメ カメ目 イシガメ科

Mauremys reevesii (Gray)

どくとく かお くさがめ
独特な香りがするので「臭亀」

【形態】

メスの背甲長は 22cm、オスは 18cm。25cm に達するメスもいる。背甲の中央と両側に明瞭な 3 本の隆起したうねがあるが、老齢個体ではなめらかであいまいになる。側頭部に黒縁の黄色い模様がある。オスは 5 歳～10 歳で体が黒化する。

【分布と生態】

日本の本州、四国、九州。国外では中国東部、朝鮮半島、台湾。産卵期は 6～7 月が中心。秋と春に水の浅いところで求愛交尾する。

【さがすポイント】

ニホンイシガメと同じ。

【よく似た種】

ミシシippアカカミガメ、ニホンスッポン、その他の野外放逐された淡水棲カメ。このうちニホンスッポンは鼻の先が細く延びていて、甲に甲板がない点で他種と区別しやすい。

【参考資料】 県 GDB②p.A-28

ニホンイシガメよりも水への依存度が高く、陸地で採食したり、陸地を季節移動したりすることはあまりありません。雑食性であり、顎やくちばしは頑丈で、タニシや大きなアメリカザリガニをばりばり食べることができます。

産卵時期と産卵行動はニホンイシガメとほぼ同じですが、ニホンイシガメよりもやや小さな楕円体の卵を 10 個前後産みます。ニホンイシガメよりも小卵多産の傾向が強いと言えます。配偶期は秋と春です。オスは水の浅い所で、向かい合ったメスの頭部に自分の吻端や側頭部をコツコツと当てて求愛します。

調査
テ
ー
マ

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮

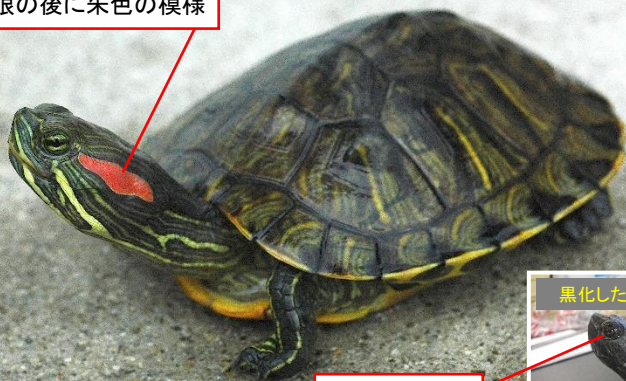
調査
し
や
す
い
月

3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮

調査テーマ

眼の後に朱色の模様



眼も黒くなる

黒化したオスの頭部



(豊田市, 2008-9-19, 矢部 隆)

(右下:名古屋市, 2010-8-22, 矢部 隆)

特外 **ミシシippアカミミガメ** カメ目 ヌマガメ科

Trachemys scripta elegans (Wied)

にんげん せかいじゅう ひろ せかい がいらいしゅ
人間が世界中に拡げた「世界のワースト100外来種」

調査しやすい月

3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2

【形態】

メスの背甲長は 24cm、オス 20cm。28cmに達するメスもある。眼の後、耳の上側に鮮やかな朱色の模様がある。また側頭部や喉に黄色い縦縞模様がある。オスは黒化するが、斑(ふ)が入ったような色彩変化で、クサガメのオスほど真っ黒にはならない。

【分布と生態】

北アメリカのミシシipp川中～下流域がこの亜種の原因であるが、ペットとして世界中に出荷されており、世界各地で野生化している。

【さがすポイント】

ニホンイシガメと同じ。

【よく似た種】

クサガメ、ニホンスッポン、その他の野外放逐された淡水棲カメ。クサガメとミシシippアカミミガメのオスの黒化個体が、ニホンイシガメと間違えられることが多いので注意。

【参考資料】 県 BDBp.57

ミシシippアカミミガメは池や川の中では浮いて泳ぐことが多く、水底を歩き回ることが多いニホンイシガメやクサガメよりも目立ちます。

産卵時期は5月～7月で、産卵行動はニホンイシガメやクサガメとほぼ同じです。ニホンイシガメよりもやや小さな楕円体の卵を10～20個ほど産み、ニホンイシガメよりもクサガメよりも小卵多産です。

配偶期は秋と春です。オスは水面でメスと向かい合い、両前肢の掌を外に向けて手の甲を合わせ、メスに向けた爪を振るわせて求愛します。二次性徴でオスの爪はメスの2倍くらい長くなります。